中国貨幣の歴史

5　金属貨幣の発生④　－楚の貨幣－

（写真は実物×1.5）

郢爯（えいしょう）

戦国時代の楚（そ）の金貨。郢爯は、小さな極印を多数連ねて板チョコレート状に作られ、これを適当な大きさに切断して使用されたと考えられている。写真は、板状のものから1つの極印で切り離されたもの。

（写真は実物×1.5）

蟻鼻銭（ぎびせん）

戦国時代の楚の銅貨。背面は平らであるが、表面は膨らみがあり文字が刻まれている。表面の形状が蟻や鬼の顔に似ていることから、蟻鼻銭（または「鬼面銭（きめんせん）」、「鬼瞼銭（きけんせん）」）と呼ばれている。

戦国時代（紀元前403年～紀元前221年）、中原諸国をはじめとする黄河流域以北の国・地域で布幣や刀幣などの銅貨が流通していたのに対し、南方の楚の国（現在の河南省南部、湖北省、湖南省、江蘇省、浙江省、山東省・陝西省の一部）では、「郢爯」と呼ばれる金貨と「蟻鼻銭」と呼ばれる銅貨が流通していた。楚は、春秋から戦国時代にかけて揚子江中流域を中心として大きな勢力を維持し、蛮夷の国として中原諸国と対峙し、独自の優れた文化を形成していた。楚はのちに秦に滅ぼされるが、秦王朝に反旗を翻し滅亡に追い込んだ項羽が楚の世家の生まれであることはよく知られているところである。

中国最古の金貨である「郢爯」は、小さな極印を多数連ねた板状の金貨で、極印ごとに板チョコレートのように切り離したものや（写真）、適当な大きさに切断したものも出土しており、秤量貨幣として使用されたと考えられている。「郢爯」という名称は、極印の多くが「郢爯」銘であることに由来し、「陳爰」銘のものもある。「郢」、「陳」はいずれも楚の都の名称（陳は楚末期の都）であり、「爯」は重量単位を表す文字であるとされている。なお、板状の「郢爯」は、平面ではなく湾曲しており、その形状が亀の甲羅のようにみえることから、古来から宝物・装飾品として珍重されてきた亀甲の伝統を受け継ぐものとされている。

「郢爯」の出土状況から流通地域をみると、揚子江流域を中心として黄河以南に及び、周辺の斉（現在の山東省）や秦（現在の陝西省）をも含む広い地域で流通していたと考えられている。こうした広範囲での流通には、当時、楚の地域が中国有数の金属産出を誇っていたことが背景にあるとされる。

一方、「蟻鼻銭」は、「銅貝」の一種で、殷・周時代（紀元前16世紀～紀元前8世紀）に物品貨幣として使用された「たから貝」（別名 子安貝）や、貝の形を模して獣骨、玉、銅などで作った「倣製貝」の流れを受け継ぐものである。「銅貝」は、表面に文字などがない無文銅貝にはじまり、文字などが刻まれた有文銅貝へと発展した。「蟻鼻銭」という名称は、有文銅貝の形状や文字が蟻の顔に似ていることに由来する。表面の文字は、「貝」「貨」を表すと考えられている文字など数種類が知られているが、解読をめぐっては諸説あり定説をみるには至っていない。

「蟻鼻銭」の流通地域は、「郢爯」とほぼ重なり、中国南方を中心とする広い地域で流通していた。「蟻鼻銭」は、重いもので6～7g程度、なかには1gに満たない小さなものも出土しており、時代とともに小型・軽量化する傾向にあることが知られている。「蟻鼻銭」については、その小さな形状から計数貨幣としての機能を有していたのではないかとする説もある。

なお、楚の貨幣として、銀貨の存在も指摘されている。戦国時代に楚の領域下にあった場所（河南省扶溝県）で1974年に布幣型の銀貨が発見されており、現在のところ他の出土が確認されていないが、銀貨の存在を裏付ける有力な根拠とされている。

［山岡直人、日本銀行金融研究所研究第3課］

【参考文献】

王毓銓、『我国古代貨幣的起源和発展』、中国社会科学出版社、1990年
加藤繁、「郢爰考」、『支那経済史考証』上、東洋文庫、1952年
彭信威、『中国貨幣史』、上海人民出版社、1965年
馬飛海・汪慶正編、『中国歴代貨幣大系』《先秦貨幣》上巻、上海人民出版社版、1988年
山田勝芳、『貨幣の中国古代史』、朝日新聞社、2000年
山岡直人、「中国貨幣の歴史2金属貨幣の発生①布幣－」、『金融研究』第22巻第2号、2003年
――――、「中国貨幣の歴史3金属貨幣の発生②刀幣－」、『金融研究』第22巻第3号、2003年
――――、「中国貨幣の歴史4金属貨幣の発生③円銭－」、『金融研究』第22巻第4号、2003年